



中電・北松江変電所  
新設工事予定区域内

こも ざわ  
薦 沢 A 遺 跡 他  
発 掘 調 査 概 報

1984年3月

松江市教育委員会

## 凡 例

1. 本書は、松江市教育委員会が中国電力株式会社島根支店の委託を受け、昭和57年度と58年度において実施した北松江変電所新設工事予定区域内埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の概要報告書である。

2. 発掘調査事業の組織は、下記のとおりである。

委託者	中国電力株式会社島根支店 取締役支店長 佐藤紀代士
受託者	松江市 代表者 松江市長 中村芳二郎
主体者	松江市教育委員会教育長 内田 栄
事務局	松江市教育委員会社会教育課 課長 石飛 進 文化係長 中西宏次 (58年10月まで) " 岡崎雄二郎 (58年11月から) 文化係主事 加藤 睦 (58年10月まで) " 菅井純子 (58年11月から)
担当者	岡崎雄二郎、中尾秀信、錦織慶樹
調査員	秦誠司、遠藤浩己
臨時職員	渡部美枝、安藤美知枝、永瀬節子、祐源和子

3. 作業にあたっては、下記の方々の協力を得た。(敬称略)

作業員(男子) 野津喜久雄、吉岡英治、奥田安昭、片寄禧福、松本克義  
青木昭夫、明石清、山脇幸人、佐々木稔、大川克己、稲田奨  
福田博之

作業員(女子) 野津静枝、野津芳子、野津玉栄、野津林子、野津キワ子、野津美恵子  
野津房子、野津千代子、野津芳美、吉村春枝、渡部茂子、青山君代  
吉岡八重子、須山恵美子、新宮加都子、青山花子、吉岡光子  
吉岡マシノ、吉岡厚美、稲田トメ子、羽室幸子、青山登美子  
青山かおる、青山安子、内田澤子、金坂みどり、田中ケイ子  
岩成礼子、木村タケノ、岩成萃子、清水末子、山野洋子、松本初枝  
丹羽野輝子、瀬古諒子、山崎八重子、太田真弓

4. 事業の実施にあたっては、中国電力株式会社島根支店用地担当課長小西喬、同課副専門役員岡昌夫、同課杉原弘俊氏の献身的な御協力を得た。記して感謝の意を表する次第であります。

5. 本書の編集は、岡崎が担当します。

6. 出土遺物の内、銅印については奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、同所飛鳥藤原宮跡発掘調査部長狩野久氏、同所埋蔵文化財センター研究指導部集落遺跡研究室長町田章氏から有益な御教示を得た。また、中世遺物については、島根県立博物館学芸員村上勇氏の御教示を得た。記して感謝する次第であります。

## 目 次

I 調査に至る経緯	1
II 歴史的環境	2
III 昭和 57 年度の調査	6
IV 昭和 58 年度の調査	14
V 小 結	18
VI 補 論	23

## I 調査に至る経緯

中国電力株式会社高根支店では電力を広範囲な消費地へ安定して供給すること、ならびに当地方の電力輸送系統を整備拡充し、電力の山陰、山陽側相互融通体制をととのえるため、松江市橋北部に「北松江変電所」を新設する計画を昭和56年9月に立案した。

そこで、まず第一に計画区域内において埋蔵文化財包蔵地が該当するか否かについての確認の依頼が昭和56年12月1日付けをもって当教委にあった。そのため昭和56年12月24日に岡崎が中電用地担当の永岡、杉原両氏と共に現地を分布調査した結果10カ所の遺跡の所在することが判明した。(第2図参照)

この内、E別所古墳は直径10mほどの円墳状で中央に石室が露出している。また、G～Jの遺跡は、須恵器窯跡等古代窯業に関係する生産遺跡である。

これらE及びG～Jの遺跡については、極めて重要な遺跡と思われるので、なるべく保護されるようお願いした。(昭和57年1月6日付けで回答)

そこで、これら埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについて、県教委文化課を混じえて協議することになり、昭和57年1月13日に協議会が行われた。

その結果、E及びG～Jの遺跡については、現状保存されることになった。

その他の遺跡については、遺跡の範囲や性格が不明であるので、まず第一に部分的に第一次調査を実施し、範囲等を確認した後、本調査に入ることになった。第一次調査は昭和57年4月12日から同年5月15日までの内、計22日間を要して行われた。

その結果、大量の土器片を出土した「萬沢A遺跡」「別所遺跡」「萬沢B遺跡」については本調査を実施する必要があること、その他の遺跡は、表土層に須恵器片が混在するのみであったので調査には及ばないことが報告された。

本調査については、まず萬沢A遺跡について昭和58年8月22日から同年12月20日まで発掘調査を実施し、昭和59年1月9日から同年3月31日までは出土物の水洗い、保存処理等を実施した。

なお、残る調査については、昭和59年4月1日から同年9月30日までの予定で完了する計画である。

## Ⅱ 歴 史 的 環 境

当地区周辺における遺跡の分布状況については、山本清氏によってまず注目され、石棺式石室の多いことが注意された。<sup>①</sup>

ついで、東森市良氏が周辺の概要を記述している。<sup>②</sup>

その後、島根大学考古学研究会による廻原（めぐりはら）丘陵の調査があり、最近では島根県立博物館の研究の一環として大井・朝酌地区を中心とした窯業遺跡の分布調査が実施されている。<sup>③</sup>

特に博物館の分布調査は、窯跡に主眼をおき、谷間や丘陵の一つ一つを精密に踏査しているもので、すでに3カ所の窯跡を新発見しており、その成果が大いに期待されるところである。

古墳は、いわゆる石棺式石室を内部主体とするものが多く、垂流のものを合めて6基あり、その時期はおおむね山本清編年のⅢ～Ⅳ期である。<sup>④</sup>石棺式石室墳の被葬者は、当地方では古墳時代後期においてかなり有力な首長であったのであろう。

1 朝酌岩屋古墳は円墳とされているが不明確である。さしわたし18m、高さ6mを測る。内部主体は、石棺式石室で凝灰岩の切石造りの平入り家形である。羨道部の入口幅1.2m、長さ2.8m、高さ1.4m、玄室の幅3.15m、奥行き2m、入口幅0.7m、高さ2.1mを測る。石棺式石室の規模としては大型の部類に属する。玄室の内壁に朱彩の施されていることが注意される。<sup>⑤</sup>

2 朝酌上神社跡古墳は、円墳とされるが不明確である。内部主体は、垂流の石棺式石室で幅2m、奥行き1.05m、高さ1.6mを計る。<sup>⑥</sup>

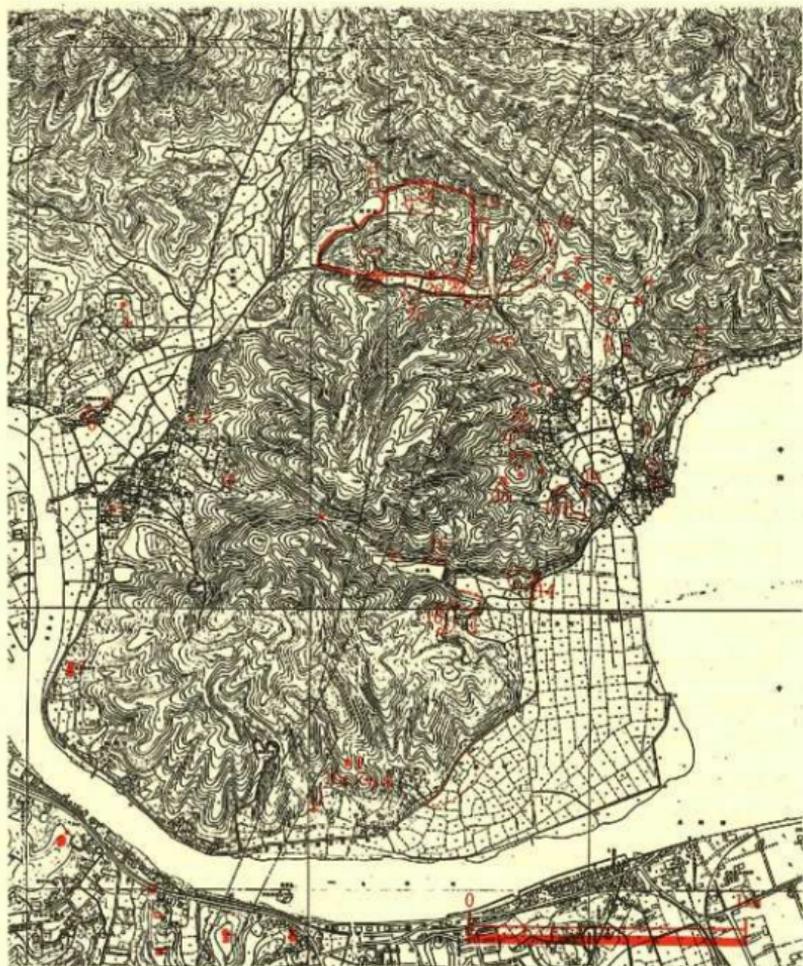
3 朝酌小学校校庭古墳は、墳丘をほとんど失っている。石棺式石室を設け石床を有する。玄室の幅は2.05m、奥行き1.2m、高さ1.4mを測る。<sup>⑦</sup>

8 阿弥陀寺古墳は、墳丘をほとんど失っている。内部主体は、石棺式石室で玄室幅1.5m、奥行き1.7mを計る。<sup>⑧</sup>

27 大井古墳群中、東森論文で1号墳とされたものは、直径6m、高さ1.5mの円墳状で、主体部は石棺式石室。玄室は幅1.9m、奥行き1.2～1.3m、高さ0.9mを計る。また、4号墳とされたものは、径6m、高さは北東側が2.4m、南西側が0.7m、人骨は再埋葬してある。須恵器の甕片多数。耳輪1、背めゆの襲勾玉1が出土。主体部は石棺式石室の垂流で、玄室は幅1.75m、奥行き0.97～1.2m、高さは1.23mを測る。<sup>⑨</sup>

28 大井横穴群は、大井古墳群の所在する同一の丘陵の南側斜面中腹に所在する。2群に分かれ、13穴以上が推定される。<sup>⑩</sup>

その他は、箱式石棺、石槨、横穴式石室をもつ古墳がある。廻原古墳群は、もと30余基の古墳



第1図 周辺の遺跡分布図

- |             |            |             |           |
|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1 朝酌岩屋古墳    | 2 朝酌上神社跡古墳 | 3 朝酌小学校校庭古墳 | 4 廻原1号墳   |
| 5 廻原2号墳     | 6 朝酌小学校前古墳 | 7 魚見塚古墳     | 8 阿弥陀寺古墳  |
| 9 阿弥陀寺後山古墳群 | 10 福富神社境内  | 11 明淨山古墳    | 12 寺尾塚跡   |
| 13 廻谷窯跡     | 14 パバタケ窯跡  | 15 岩砂窯跡     | 16 蛇貫谷窯跡  |
| 17 山津窯跡     | 18 明曾窯跡    | 19 勝田谷窯跡    | 20 焼山遺跡   |
| 21 岩穴平遺跡    | 22 鹿沢B遺跡   | 23 薮沢A遺跡    | 24 朝酌別所遺跡 |
| 25 鷹沢野山遺跡   | 26 別所古墳    | 27 大井古墳群    | 28 大井横穴群  |
| 29 山巻古墳     | 30 イズキ山古墳群 |             |           |

があったといわれるが、現在では、組合せ石棺だけが遺存するものを含めて計6基が認められるに過ぎない。

4 磯原1号墳は、一辺10m、高さ1.5mの方墳で、横口式石棺の前方に羨道をつけたとでもいうべきもので縦長プランで長さ161cm、幅74cm、高さ66cmを測る。7世紀後半頃の築造といわれる。<sup>⑫</sup>

5 磯原2号墳は、箱式石棺のみを遺存する。人骨、須恵器、刀2～3本が発見されたという。<sup>⑬</sup>

6 朝酌小学校前古墳は、もと横穴式石室があったというが今では墳丘は消滅し、石材は朝酌公民館の庭に遺存している。<sup>⑭</sup>

9 阿弥陀寺後山古墳群は、5基から成る。1号墳は、阿弥陀寺古墳の西側約15mの丘陵先端部にあり、続いて北側、丘陵上部に向かって4号墳までの小古墳が連なる。いずれも一辺7～8m、高さ0.5～1.0mを測る。5号墳は、4号墳からさらに尾根を約50m上ったところに所在し、一辺18m、高さ2mの中規模の方墳である。南部におよそ8mの小高い平坦面を有する。<sup>⑮</sup>

11 明事山古墳は、一辺10m、高さ1.5mの方墳。<sup>⑯</sup>

26 別所古墳は、直径約7m、高さ1mの円墳状で、簡略横長の石室を設ける。

29 山巻古墳は、昭和40年、茶園開墾に際して発見されたもの。内部主体は、幅95cm、長さ2.4mの組み合わせ石棺で、38点の須恵器燹片、蓋坏、刀子、鉄銚、金環が出た。須恵器は、山陰Ⅲ期のもの。<sup>⑰</sup>

30 イズキ山古墳群は、計5基の古墳から成るといわれるが、開墾によって壊され不明確である。内部主体は、横穴式石室と組み合わせ石棺であるといわれる。この内、2号墳は地主神として祀っており、山陰Ⅲ期の須恵器片が石材の上に置いてあった。<sup>⑱</sup>古墳の規模としては小規模のものが多く、大橋川北岸に立地する7魚見塚古墳は全長62mの大型前方後円墳で、その築造年代は、ほぼ5世紀代のことと推定されている。<sup>⑲</sup>

この古墳は時期的に他の遺跡より古いので、全体の傾向の中で関係づけることはむづかしいが、南岸の大型古墳の分布状況を考えるならば、古墳時代中期において大橋川下流域が交通上、軍事上の要衝として重要視されていたことを推定させるものである。

次に生産遺跡についてみると、窯跡は以前から8カ所ほど知られていたが、最近の分布調査では大井の集落から峠を越えた北部周辺や中海沿いの岩汐地区でも窯跡が発見されている。

また、ババタケ窯跡周辺では、須恵のⅠ期、寺尾窯跡、瀬谷窯跡ではⅡ期のものがそれぞれ発見されており、従来考えられていた時期よりやや古い段階から窯業生産が開始されたのではないかと考えられるに至っている。

12 寺尾窯跡は、谷間の北半部に土器片が集中し、窯壁の塊も認められる。須恵器は山陰Ⅱ期～

IV期までのものがあるが、Ⅲ期のものが多い。<sup>23</sup>

13 廻谷窯跡は、昭和46年農道をつけた際、崖面に断面が発見されたもので、3カ所認められる。この内、最も奥のものは横幅170cmを計り、壺片、蓋坏、長頸壺が出土している。この内、蓋坏は山陰Ⅰ期に含めてもよいものである。<sup>24</sup>

14 ババタケ窯跡は、丘陵南端部に張り出した畑地一帯で窯壁塊が認められ、土馬が出土している。山陰Ⅲ期のもの。<sup>25</sup>

15 岩汐窯跡は、岩汐池の北岸部にあり、4基以上あるものと思われる。この内、1号窯は焼成室の断面が見られ、幅2.34m、高さ約1mを計る。4回以上の使用が考えられる。山陰Ⅲ期、Ⅳ期の須恵器が出土。<sup>26</sup>

16 蛇貫谷窯跡は、谷間の奥の畑に須恵器片大量に散布。長頸壺が多い。円面甕の出土していることが注目される。山陰Ⅳ期。

17 山津窯跡は、道の両側に灰原の断面が露出。窯壁塊が認められる。Ⅳ期。<sup>27</sup>

18 明曾窯跡は、川筋に灰原が露出。Ⅳ期以後、糸切り底の段階まで。

19 勝田谷窯跡は、谷間の西斜面に須恵器片散布。窯壁塊あり。Ⅳ期以降、糸切り底の段階まで。

20 焼山遺跡は須恵器、土師器片を広範囲な茶園地内から出土。集落跡と推定される。<sup>28</sup>

21 岩穴平遺跡は、昭和55年7～8月にかけて中電の鉄塔用地にかかり、一部調査。窯関連の建物跡を検出。<sup>29</sup>

22 溝沢B遺跡は、谷間の畑地斜面に遺物包含層があり、子持壺の破片が出土している。

24 朝酌別所遺跡は、水田地に遺物包含層あり。

25 溝沢野山遺跡は、畑地に須恵器、土師器片散布。<sup>30</sup>

このように当地区の歴史は、縄文～弥生時代までは定かではないが、5世紀末もしくは6世紀前半から須恵器という新しい土器の生産の拠点が設けられたことにより、政治的、経済的基盤が確立し、奈良、平安期に至るまで土器生産が継続して大量の土器が墳墓の副葬品や日常生活の什器として供給されたことが知られる。

このような大量の土器の需要、供給関係の背後には、当然生産集団を掌握していた有力豪族のいたことが考えられる。

### Ⅲ 昭和57年度の調査

#### 調査の概要

##### (1) 篤沢A遺跡

谷間の中はどと出口に4m四方の調査区(グリッド)を2カ所ずつ設定した。

##### 第1区

第1層は厚み40cmの明褐色土で昭和46年当時、重機によって畑を造成した折りの埋土である。須恵器片が含まれていたが原位置を示すものではない。

第2層は厚み30～60cmの褐色砂質土で昭和46年以前には畑地にしていた旧耕作土である。上部に厚み10cmほどの暗褐色層を有する。須恵器片、土師器片を多量に出土した。器形の分かるものは特に下層から多く出土し、古墳時代後期の蓋坏類や奈良～平安時代にかけての小型壺、蓋坏類が認められる。

第3層は地山の黄色～白色の小塊をしもふり状に多く含む褐色土で硬い。上層では須恵器、土師器片を含むが、下層では小礫、転石を含むようになり、遺物も殆んど含まない。炭化物や火熱を受けた小礫もある。須恵器は古墳時代のもの他、土師質の土製支脚やこしきの把手、体部が認められる。

第4層は黒褐色の粘性土で遺物を含まない自然堆積土である。

##### 第2区

第1層は厚み40～90cmの地山のブロック混じりの明褐色土で、やはり重機による埋土である。

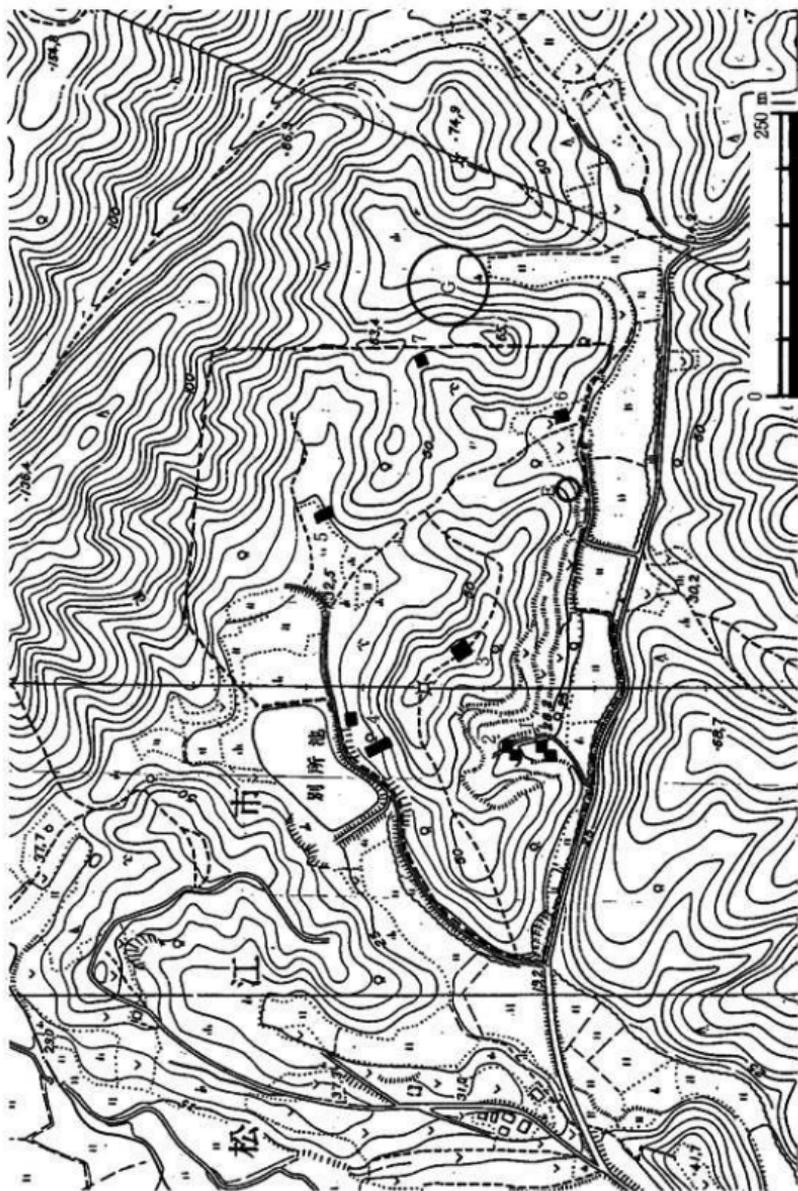
第2層は暗褐色粘性土で転石を多く含む埋土である。

第3層は灰褐色砂質土で遺物は少ないが渡金環(耳輪)の出土が注意される。

第4層は褐色砂質土で白色の小塊をしもふり状に含む。須恵器の高杯や壺、小壺、蓋坏類の他、土馬が2体分出土したことが特筆される。土師器片や土師質の土製支脚も見受けられた。おおむね奈良～平安時代のものである。

第5層は黒褐色砂質土で遺物を含まない。

地山は黄褐色粘性土で非常に硬い。地山は山側東半部において確認され、西南部に向けては急な角度で落ち込んでおり、その行方は確認出来なかった。この地山に幅1.2m、深さ30cmほどの掘り込みが認められた。長さは2m以上ある。周囲には直径15～40cm、深さ10～18cmの柱穴と思えるピットが5個認められた。この土壌内には暗褐色土が堆積し内部からは奈良～平安時代にかけての須恵器の杯や土製支脚が出土した。しかし、まとまった遺物はなく、床面も南西方向



第2図 第1次調査箇所図

へ急傾斜しているので、土質の性格はよく分からない。

### 第3区

第1層は厚み40cmの埋土である。

第2層は黒褐色土で旧耕作土である。調査区の全面にわたって遺物が発見された。須恵器では高台付きの坏身、輪状つまみ付きの蓋、大甕の破片、土師質のものでは、かまどの一部、こしきの把手などが認められ転石が散在していた。中世陶器片もあり。

第3層はやや硬い褐色砂質土で古墳時代後期の有蓋高坏や奈良～平安期の輪状つまみの蓋の他鉄棒状の鉄器も発見された。

第4層は粒子の荒い褐色～暗褐色の砂質土層で、炭化物や小礫を混じえる。北壁の断面で上端径45cm、底径16cm、深さ25cmほどのピットが確認された。

古式土師器（古墳時代前期の土器）の壺の口縁や推定長14.5cmになる鉄製刀子が出土している。

第5層は褐色粘性土で遺物を全く含まない。

第6層は黒褐色粘性土で、やはり遺物を全く含まない。

### 第4区

第1層は厚み60cmの埋土で須恵器若干。

第2層は暗褐色土で調査区に北東部にかたよって、かまどやこしきの把手、土製支脚、大甕の破片等が集中的に出土。火熱を受けた転石も散在していたことから住居内の炉跡の一部かとも思われたが重機によりやや動かされた形跡が強い。土馬の破片も発見された。

第3層は炭化物、小礫混じりの褐色土で下部に鉄釘が発見された。

第4層はやや暗い褐色土で第3層との間に焼土や黒色土の帯状のうすい界面がある。上部から20～30cm下位までは土師器片が認められたが、それ以下の土層では粘性が強まり遺物は含まれていない。

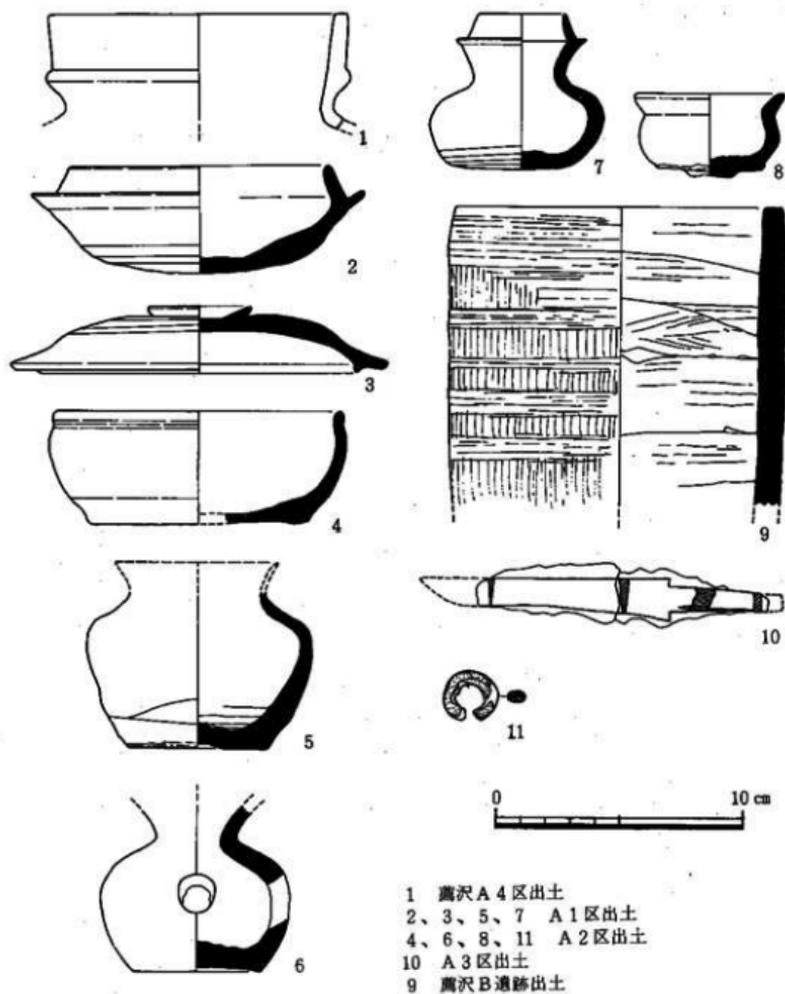
第5層は暗褐色～黒褐色粘性土で遺物を全く含まない。

### (2) 藪沢古墳推定地

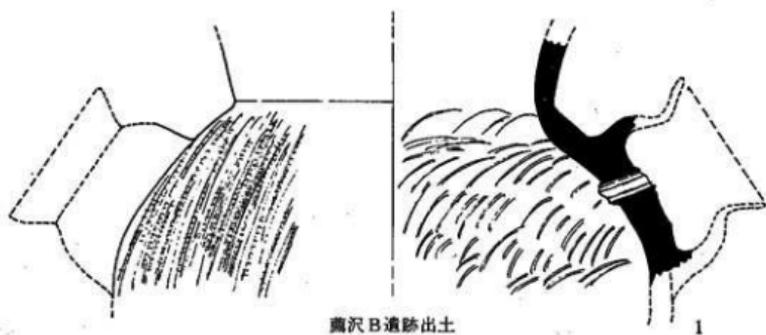
当初15m×8m×高1mの長方形墳と推定されたが、自然地形と近似し、しかも標高66.6mという高所にあるため古墳でない可能性も残していた。

調査した結果、表土から15～20cmの褐色砂質土があり、その下は黄色～明褐色の軟質砂岩で岩盤となっている。

中心主体部は、もち輪遺物も全く見当たらず、古墳ではないという結論に達した。

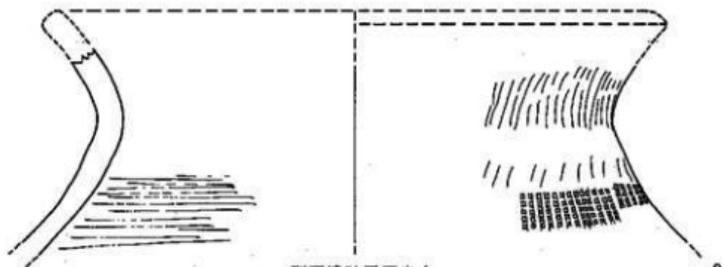


第3图 出土遺物実測图(1)



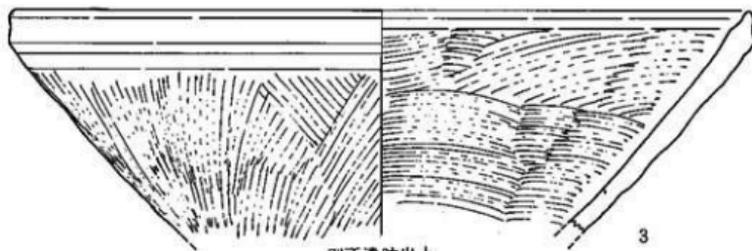
蕨沢 B 遺跡出土

1



別所遺跡周辺出土

2



別所遺跡出土

3



第 4 図 出土遺物実測図(2)

### (3) 朝酌別所遺跡

#### 第1区

杉林斜面の中に2×5mの長方形トレンチを2カ所隣接して設定した。

いずれも褐色土層の下は明褐色粘性土で加工した形跡もなく遺物も皆無であった。

#### 第2区

竹林の中に4×4mの正方形の調査区を設定した。表土の浅い位置にわずかに須恵器片が出土した以外には遺物は皆無であった。

調査区東南角において上端径50cm以上、底径30cm、深さ46cmの大規模なピットが検出されたが表土層と同じ土が堆積しており、比較的新しい時期のものと思われる。

### (4) 別所遺跡

#### 第1区

水田中に4×4mの調査区を設定した。第1層は水田耕作土で厚み30cmを計り、須恵器片を多く含む。第2層は礫と転石を多く含む灰褐色土層で東南部において桃色～黄色の砂質土があり、礫、転石のすき間から須恵器片に混じって中世の陶器片が出土した。この桃色～黄色ブロック混じりの土層の堆積している部分は東壁において25cmの段によって低くなっており、中世の住居跡の一部かとも思われる。これを第3層とする。

第4層は礫の少ない暗褐色土で厚み40cm、住居跡推定地直下で15cmある。

第5層は礫の多い暗褐色土層で厚み15cmを計る。須恵器片若干出土。

第6層は大礫、転石多い淡緑色砂質土で、第5層との界面では須恵器片が出土するが、それ以下では遺物は全く含んでいない。

#### 第2区

第1区の南側山林の崖上に2×3mの長方形トレンチを設定した。

表土は厚み30cmの暗褐色土で須恵器片が若干出土した。地山面には何ら遺構は確認されなかった。

### (5) 高沢B遺跡

山の斜面の畑地に4×4mの正方形グリッドを設定した。グリッドの南東部から北西部にかけて高さ24cmの段がほぼ直線状に認められた。上段も下段も地山に相似した明褐色の砂質土であり、後世山の斜面を切削あるいは埋め立てた際の仕業であろうと思われる。

下段の平坦面を観察したところ、直径97cmの円形土壇を発見。その外周には幅10～15cm前後

の暗灰色粘性土が取り巻いていることが分かった。この円形土壌は深さ69cmを計り、上部48cmほどが均一な黄褐色砂質土で須恵器片に混じり、江戸時代以後の施陶器片（小皿）が1片発見された。下部は灰色粘性土と褐色砂質土の互層となっているがこれらの層からは須恵器片、土師器片が出土している。須恵器片は、概して奈良時代～平安時代にかけてのものである。この円形土壌は奈良～平安期の土器を包含した黒褐色土層を分断して江戸期以後掘り込まれた「野臺」の類であろうと思われる。

調査区の西北部には、北北西から南南東に向けて走る幅25cmほどの石列が2条平行に設けられている。これも堆積土のかなり上部に構えているので、やはりずっと新しい時期のものであろう。排水溝と思われる。野臺と関連があるものであろう。この石列の北端からは須恵器の子持臺の破片が出土しているがこれは古墳時代後期のものである。

#### (6) 大井別所遺跡

谷間奥の畑地斜面に4×4mの調査区を設定。表土の耕作土層からは須恵器片が若干出土するも地山面からは何ら遺物は発見されなかった。

グリッド中央部は南北に溝がとれている。溝の深さは北壁付近で10cm、上端幅50cmを計る。形成された時期は不明

#### 遺跡の性格

ここでは特に遺物や遺構を確認した3カ所の遺跡について検討する。

##### (1) 溝沢A遺跡について

出土遺物の多くは中層の褐色土から出土しているが周辺の地山に包含されているものと同じ小礫が含まれ、土器片も上部から下部まで均一に出土し、まとまりを示さないことからある時期にこの谷間が土砂崩れで崩壊し中央低地に分厚く堆積した結果ではないかと考えられる。

出土遺物の中に土師質のかまどやこしきなどの食生活に関連のある遺物が多数見受けられることは、この地にかつて住居のあったことを推定させる。また、土馬が3点出土したが、これは水神信仰やさいの神信仰などのお祭りに使用（神様の乗り物）されたものとして注意される。大井、朝酌地区では土馬の出土例はこれまでに20数例数えられているが他地区では殆んど類例がなく、須恵器の窯で土器と共に焼成された可能性も大きい。当地方独自の祭式に基づくものかも知れない。

須恵器片の出土量は生活跡にしては異常に多いものである。これは須恵器製作に従事した工人達の住居であれば、その労働の対価として土器を手に入れ易いという条件があったためではない

だろうか。

## (2) 別所遺跡について

出土遺物の多くは、水田耕作土の下の礫、転石混じりのシルト質土や砂質土であり、谷間の崩壊による結果と考えるしかない。しかし中世の陶器片を出土した層は、竪穴住居跡の可能性の強い落ち込みの中の土層であるので、谷間が安定した中世において再び居住が始まったものと考えられる。

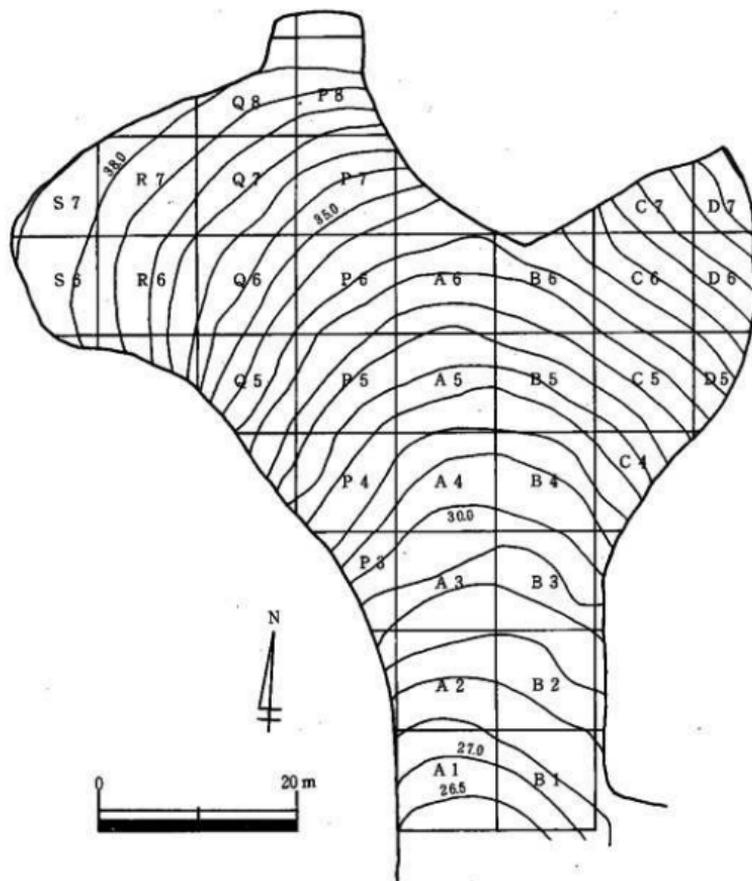
この中世の陶器片は、山陽地方で広く出土する「亀山焼」に類似している。年代は平安末～室町後期（戦国）と幅が広い。県内では広瀬、富田河床遺跡、松江西川津町地内、東出雲町、大木権現山古墳群、松江出雲国造館跡などで発見されており、中世の日常雑器として輸入陶磁器と共に今後検討する必要があるものである。

## (3) 廣沢B遺跡について

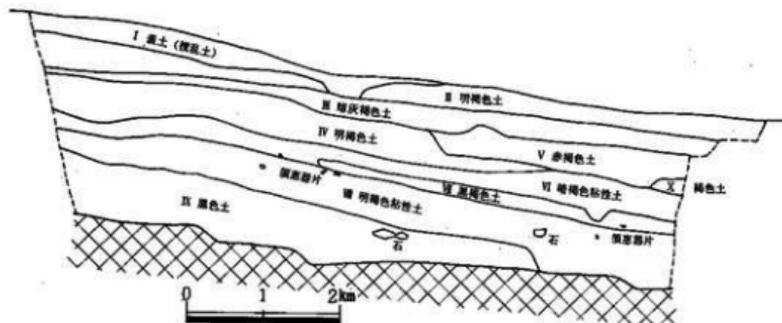
円形土壇は、近世以後の水ため用の野臺である可能性が高いが、この円形土壇によって切断された黒褐色土層には、やはり須恵器片が多量に含まれており、付近一帯が段々畑や田に切削加工されたにもかかわらずなお遺構の残存している可能性が強く、しかも付近には東部に昭和55年度において調査した「岩穴平遺跡」があり、須恵器窯跡の関連施設の遺構があるものと推定される。

#### IV 昭和58年度の調査

58年度の調査は、当初4月から着手する予定であったが、中電側の土地買収交渉の遅延等もあって結局8月22日からようやく開始した。そのため、58年度中に全ての本調査区の調査が完了せず、扇沢A遺跡の調査が中途のまま12月20日をもって一応の終了をみた。その後、59年3月ま



第5図 調査区グリッド設定図（等高線は標高）



第6図 A区東壁断面図

でまで出土遺物の整理作業を行なった。

調査は、まず廣沢A遺跡の所在する谷間の畑地部分について10m四方のグリッドを設定し、東西区を谷間の中央部から東部にかけてA…C、西部にかけてPQ…と呼び、南北区を谷間の入口から奥に向けて1、2、3…とした。

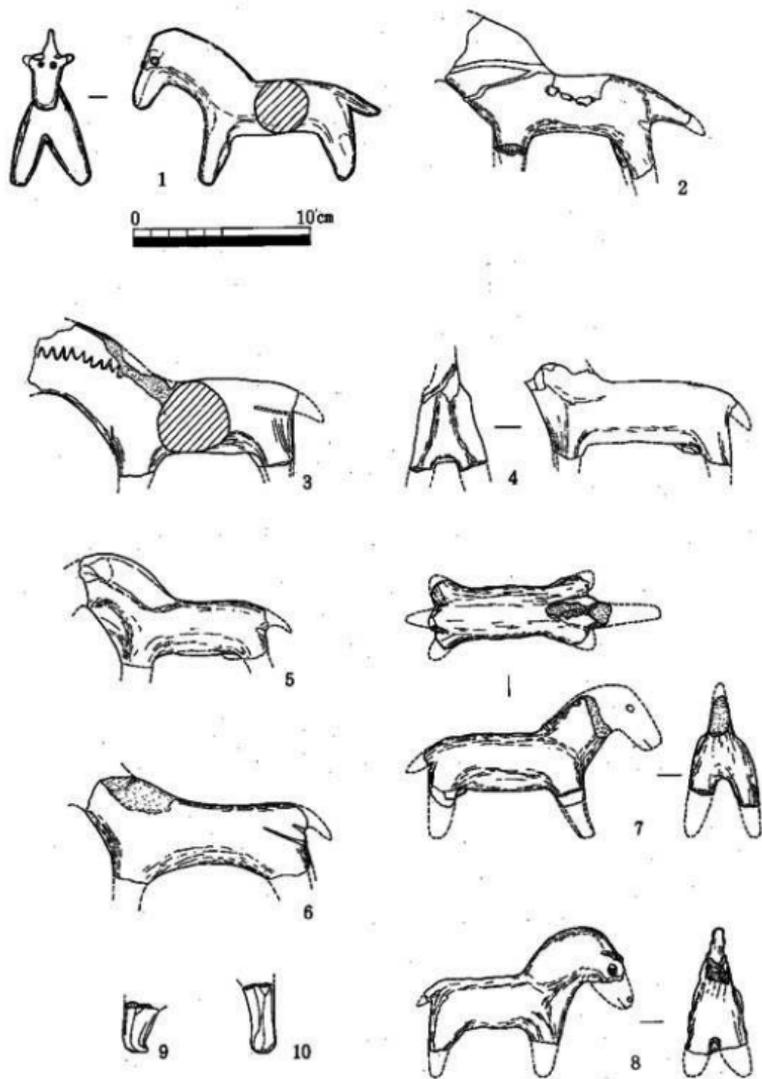
A-1区～A-5区にかけては、確実な遺構は皆無であった。しかしながら、須恵器等の出土遺物の量は予想以上に多量であった。

すなわち、出土遺物は表土層から始まって、地表面下をおよそ1.5mまでの各層からまんべんなく出土した。そして、山陰の須恵器編年でいうところの第Ⅲ期～第Ⅳ期、そして奈良・平安期までの幅広い各時期の土器類が混在して出土していることが注意される。

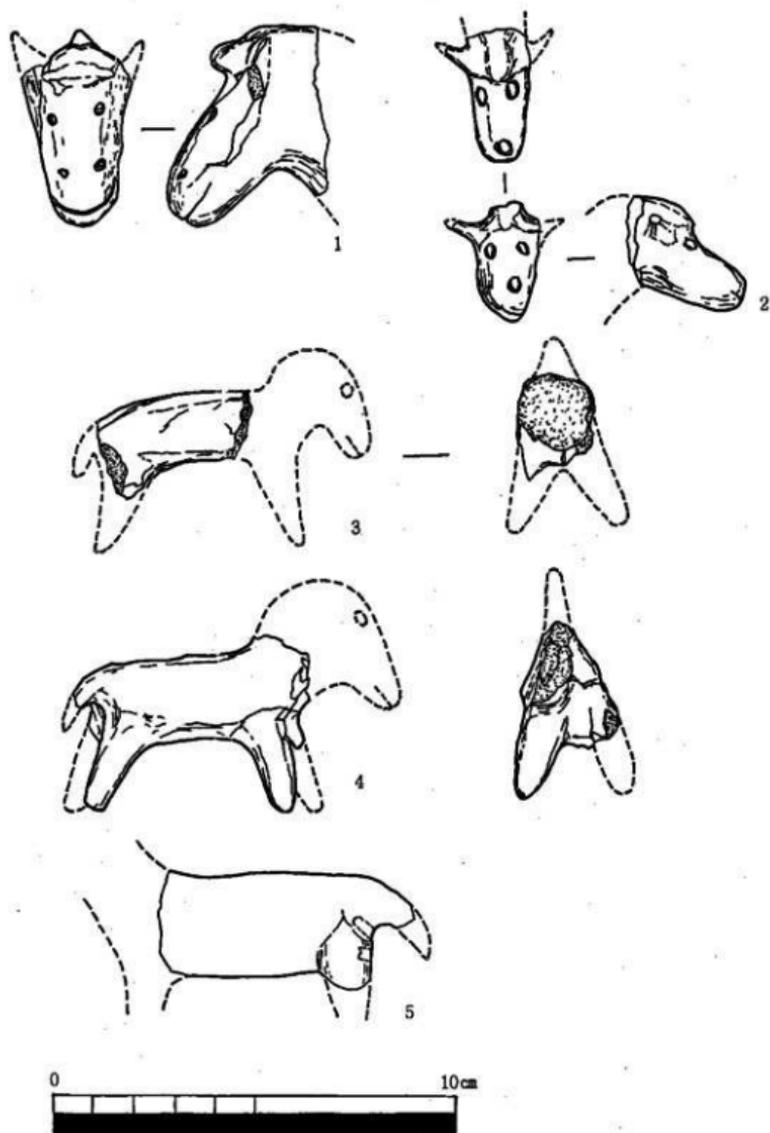
出土品はこうした土器の他に、B5区の表土直下から印文不明の銅印1顆、A1区、A2区、B6区のSB01内からそれぞれ紡錘車が、A1区の最下層(第5層)からはサヌカイト質の大型石鉄、A3区の第1層(攪乱土層)からは波銀環、A2区の第3層からは青めのう製の勾玉など多種多様のものが出土している。さらに、昨年度に引き続き土馬が大量に出土した。すなわちA1区でオス1体、メス1体、A4区1体、脚部2片、A5区オス1体、メス1体、顔部1個、C6区飾馬1体、完形品1体、P5区顔部1個が出土。

胴体部分7体分に相当する。

遺構は谷間奥部において竪穴住居跡2棟が確認された他は皆無であったが、コンテナ容器でおよそ100箱を数える土器のおびただしい数は、通常の住居跡では考えられないものである。



第7图 出土遺物実測图(3)



第 8 图 出土遺物実測图(4)

## V 小 結

昭和58年度は、廣沢A遺跡のはぼ3分の1程度を調査したにすぎず、遺跡全体の性格について結論づけることは早計であるが、これまでの成果によって一応の傾向は分かるのでそれに基づいて若干の問題点について考えてみたい。

### (1) 遺構について

唯一の遺構として谷間奥部で古墳時代終末期の竪穴住居跡が2棟認められたことは、この谷間に集落があったことを証明するものである。

**SB01** B6区で検出された。南部へ傾斜する地山を1mほど掘り囲めた竪穴住居跡で、平面形は隅丸方形を呈し、北部の角付近をわずかに遺存するのみであり、南部は地山の崩壊により不明である。角部を北にして北西辺は約1m、北東辺は約2mを遺存する。須恵器、土師器の他に須恵貫紡錘車が1個出土している。

**SB02** C6区にて検出。南部へ傾斜する地山を約30cm掘り囲め、斜面にはぼ平行する隅丸方形の竪穴住居跡で一辺3m以上あると思われる。

古墳時代終末期～飛鳥時代の須恵器の他、かまどの一部や土馬が2個出土している。

谷間中央部から入口にかけては、明確な遺構が見当たらず遺物が含まれているのみであったが、これは土器片の多さ、特に土師器のかまどの破片や須恵器の蓋坏類が多いことから、やはり複数の住居のあったことが容易に推定されるところである。

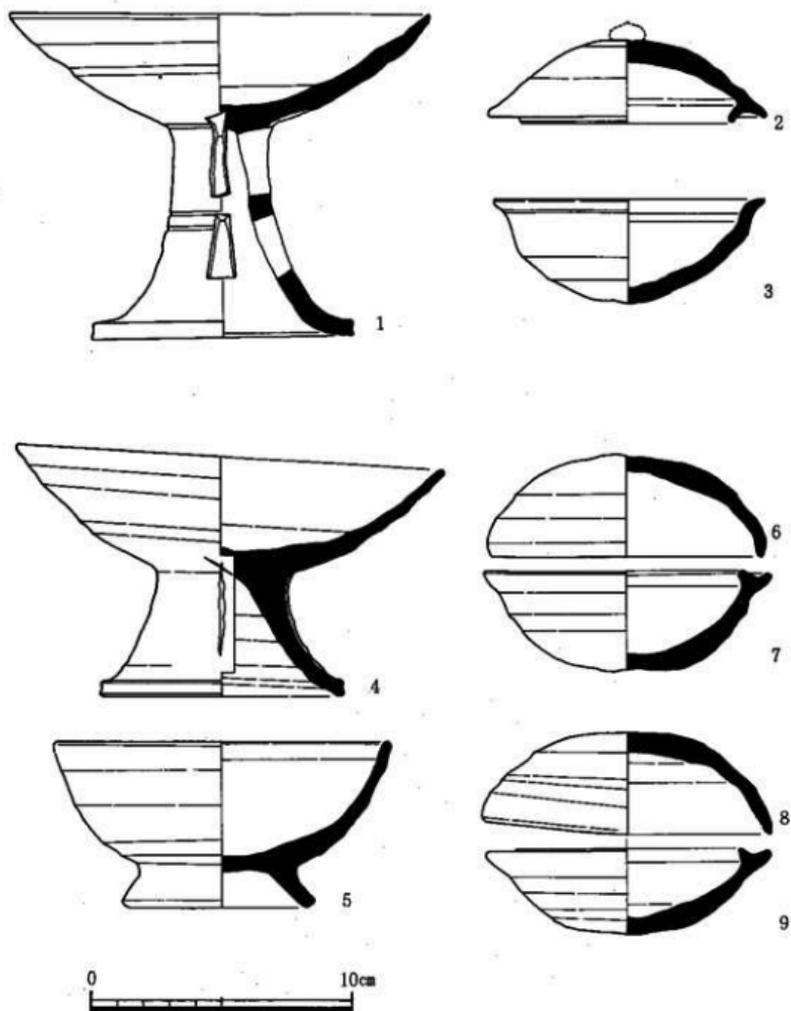
それでは何故消滅したのであろうか。恐らく谷間の中心部の固い地盤は深い位置にあり住居はそれより上部の不安定な軟かい土層に掘り込まれたのではないだろうか。それが恐らくは平安末か中世前期に集中豪雨等の自然災害によって大規模に谷間が崩壊したためにこの集落も全滅のうき目を見たのではないだろうか。

### (2) 遺物について

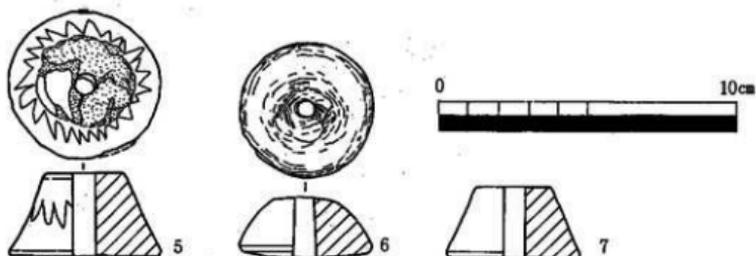
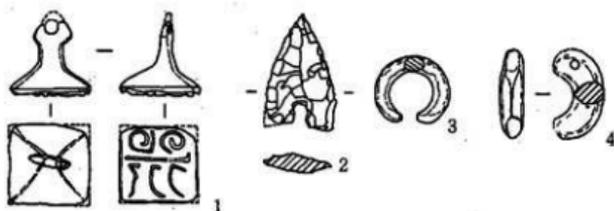
#### SB02の須恵器

出土遺物の内、SB02内出土の須恵器について検討してみよう。1・2の坏蓋、3・4の坏身はいずれも受部径、口径が11cm前後と小さく、底部外面の調整は未だ糸切り手法が導入されていない段階のものである。6の坏は、高台を付けたものであるが底外面はヘラ削りによる糸切り磨きの後、高台を付け、更に回転ナデ調整をして仕上げている。

次に1～6より上層の第3層から出土した須恵器について検討してみよう。



第9图 出土遗物实测图(5)



第10図 出土遺物実測図(6)

7の高杯は、長方形の二方二段透しを有するもので、古墳時代からの高杯の形式を踏襲するものであるが8、9の蓋杯は、柳浦編年でいうところの第1式に該当するものと思われる。

このように同一の層でも新古の須恵器がやや混在し、SB02の年代を明確にし得ないが、最下層の土馬と共に出土した須恵器の示す古墳時代終末期の頃と考えてよからう。

#### 土馬

57年度の調査で5体分、58年度の調査で7体分出土した。その内、飾馬が1体認められるもの他は、全て裸馬である。

飾馬は、現存する長さ14cm、高さ9cm、胸の厚み3.2cmを計り、手綱、胸がい、尻がい、蹄泥の各部を表現する粘土ひも、もしくは粘土板がはくりし、その部分だけ表面が淡灰色となった痕跡を見出すことが出来るものである。

裸馬は、たて鬘をへら状工具で波状文に表現する程度のものである他は、馬具などを全く表現しないものである。また大きさを見てみると、長さ20cm前後のものと10cm前後の2種に大別出来る。

こうした区別が祭りの性格によって土馬の使われ方が違うことを示しているのか不明であるが、ここで注目したいのはオス、メスの性器の表現をしたもの、尻穴を表現したものがかなりの割合で認められることである。

オスの場合は、後足の股間に長さ20mm、幅6mm程度の粘土ひもを貼り付け、尻穴をあけるもの、メスの場合は、股間に上下2つの穴をあけるもので、その深さは0.6～2.0cmもある。

このことは、一体何を意味しているのであろうか。馬の形だけを表現しようと思えば、性器の表現まであえてしなくてもよいと思うので、やはりこれには深い意味があつたことと思われる。

土馬の性格については、これまでいろいろ推測されてきているが、馬と水神との性的結合によって五穀豊じょうを促し、水神を和らげたのではないかとも考えられる。

こうした性器を表現した土馬は、今のところ他地では全く見られず、出雲東部にのみ分布する特異な形態として抽出することが出来るように思われる。

#### 銅 印

B5区の元竹林であった旧表土層の上面からわずか2cm下部で発見された。鑄銅製で錆化が激しいものの、印面と鈕との中間部分は当初の面を維持し、淡緑色を呈する。印面の縁は全て欠失し丸味を帯びている。鈕はいわゆる蒼鈕で、上部に直径約4mmの楕孔をあける。上半部は欠失している。重量は24gで現高2.5cm、推定復元高2.8cm、印面は2.7cm角の正方形で縁は3mmほど垂直にこしらえている。印文は漢字を表現したものとしてはあまりにも簡略化されすぎている感じを受けるが、今のところ類例は見当たらず、由来の検討にまちたい。あるいは、呪符のような符号を表現しているかも知れない。

県内の銅印出土例としては、昭和12年に松江市大草町の出雲国府跡のある字「日岸田（ひがんでん）」という水田から出土した印文「春」1顆と昭和58年に八東郡玉湯町の宮ノ上遺跡出土の印文不明の1顆があり、これが3例目である。

<注>

- ① 山本清「古墳の地域的特色とその交渉—山陰の石棺式石室を中心として—」(山陰文化研究紀要 5号 島根大学昭和39年12月所収)
- ② 東森一良「朝酌の古墳文化」(松江市立女子高等学校研究紀要第1号 昭和45年所収)
- ③ 島根大学考古学研究会「菅田考古第14号」
- ④ 村上勇「山陰の須恵器窯跡」第10回山陰考古学研究会発表要旨 1982
- ⑤ 山本清「山陰の須恵器」(島根大学開学10周年記念論文集 昭和35年2月所収)
- ⑥ 第1図中1
- ⑦ " 2
- ⑧ " 3
- ⑨ " 8
- ⑩ " 27
- ⑪ " 28
- ⑫ " 4
- ⑬ " 5
- ⑭ " 6
- ⑮ " 9
- ⑯ " 11
- ⑰ " 29
- ⑱ " 30
- ⑲ " 7
- ⑳ " 12
- ㉑ " 13
- ㉒ " 14
- ㉓ " 15
- ㉔ " 17
- ㉕ " 20
- ㉖ " 21
- ㉗ " 25
- ㉘ 村上勇「山陰の中世の焼き物に関する覚書」(松江考古第2号 1979年所収)
- ㉙ 広瀬町教育委員会・富田川河床遺跡調査団「富田川河床遺跡発掘調査報告」昭和52年ほか
- ㉚ 注㉘に同じ
- ㉛ 東出雲町教育委員会「大木権現山古墳群」1979年
- ㉜ 松江市教育委員会「出雲国造館跡発掘調査報告」1980
- ㉝ 松江市教育委員会「岩穴平遺跡・稲葉城跡」1981

## VI 補 論

### 土馬と祭祀についての民俗学的考察

#### 1) 序

古代の遺跡、古墳、神社等から出土する小型土製馬を一般に土馬と呼んでいるが、この土馬は九州地方から東北地方南部まで広く分布し、とりわけ畿内に多く畿内でも特に大和で顕著に出土  
我が出雲地方に於ても八東郡美保関町の美保神社、松江市手角町の寺の脇遺跡、同市西川津町のタテテウ遺跡、同市大井町の大井古窯址群、同市竹矢町の區分尼寺跡、同市八幡町の武内神社、同市佐草町の八重垣神社境内鏡ノ池、同市馬高町才ノ峠遺跡、八東郡八雲村の八雲村御崎谷遺跡、仁多郡横田町の上方林遺跡などからの出土例がある。これらの土馬は出土する遺跡と文献にみえる馬との関連から水盃祭祀、祈雨祭祀、墓前祭祀などに使用する目的で製作されたという考えで落ち着くようである。

では、これらの土馬がなにゆえに製作されたのかその起源を中心に民俗学的あるいは比較民族学的に考察してみたいと思う。

#### 2) 馬と水

ここでは水にかかわる祭祀になぜ馬(=土馬)を供犠するようになったか、その起源について考察してみたいと思う。

まず隣国中国には古代から竜馬の思想というものがあった。これは水神または水精が竜の形をとってあらわれるという思想であり、中国をはじめ東亜に共通して存在する信仰であるらしい。

(1) (注1) この水盃としての竜は馬と密接に結びついており、日本に於ては水辺に牧をかまえて竜種二駿馬を求むるという思想が羽前、羽後、岩代などに残っている。(2) さらに上代の牧が河畔に多い点「馬は水辺で飼うべきもの」との考え方が受容されていたらしい。(3) つまり水辺で馬を飼うことにより、水神=竜が種馬の役割を果たしその胤として駿馬を生むという中国輸入の思想が受け入れられていた。

しかしこの竜馬の思想は日本各地のいたるところでそれと同類の観念を見出し得る。このように比較的新しい時代の京師に於る一部知識階層の読書にはじまった竜馬の思想と同一系統の観念が日本列島のすみずみまで広くいきわたるものだろうか。この問題の1つの解答として石田英一郎氏の文章を引用する「……文献の渡来という、限られた知識層のあいだの交渉とは別個に、交易の目的あるいは、その他の事情による常民相互間の往来、したがってそれにとまなう文化の

交流の行なわれたということもありえないだろうか。あるいはむしろ馬と水神とのこの特殊な関係は、おそらく中国文献との接触以前のわが国において、すでにかの地と共通した基礎文化の一部として、常民の俗信のうちに広く分布していたのであって、だからこそ中国伝来の竜馬の思想なども易々とこれに結びついた(4)。」

上記の説を証明する証拠となるかどうかは、検討を要すと思うが、縄文時代中期の遺物として東京都八王子市宮下遺跡出土の土器や長野県尖石遺跡出土の土器、長野県諏訪郡富士見町藤内遺跡出土の土器などには蛇のモチーフがあり、これらが泉の周辺近くで出土しているという事実がある。古代人は、種々様々な神を持ちまた色々な祭祀の方法を持っていたと考えられる。これらの古代人の信仰が、または神に対する観念が生活様式を含む環境の様々な変化を通して飛鳥、奈良時代へとつながってくるものである。従って蛇のモチーフを持つ土器が直接水神信仰と結びつくと考えるのは早急すぎると思われるが、なんらかのつながりがあり、そしてそれが中国から流入した竜馬の思想と混じり合い土馬の祭祀として結実したと考えることは不可能であろうか。

### 3) 牛と祭祀

皇極紀中に「……、域殺ニ牛馬、……」とあり、馬だけではなく牛も供犠の対象となったが、その理由についてここでは考察してみたい。

日本で家畜として最初に飼われたのは牛である。古代の農耕民にとって牛は、自らの農作業を補助する重要な家畜であった。では牛がいかなる理由によって祭祀に登場するようになったかについては以下に記述する。狩猟民や「牧畜民の社会では男子が経済的、社会的地位が高く、原則として父権の性格が強いのに反し、母権的または母系的な制度は、女性の手による植物性食料の採集や栽培を基礎とした社会に見出される傾向がある。」(5)そして最古の時代にとって婦女が懐妊するかいは、もっとも重要な問題であり、「妊娠の端緒が月経の閉止によって示されるという認識は、確かに人類の最も初期の経験の一つであったに相違ない。この重大問題は最古の時代にあっても、月の運行の助けをかりて、答えられた。(6)この月と妊娠か否かとの関係は生長、繁栄、豊饒に関連する種々の事象に月の決定的影響力を帰せしめたのではないか。それが月＝女神となり、五穀豊饒の祭祀においてその女神のために神聖化された性獣・人々の農作業を助け、乳を生み出す性獣(＝雌牛)が供犠として用意されるようになったのではないか。

また、ハリスン女史はここに興味ある解答をしている。

「神が、その上に立ったり乗ったり、またはその頭をかぶったりしている動物はその神の原始的動物形であることがいまでは承認されている。(7)従って彼女はギリシャ神話のポセイドン(注2)は、その動物形が馬であり牛であったと説明している。さらに「雄牛は完全な意味で彼(ポセイドン)の乗物、乗媒、彼の運搬者であった。神その者は、何の現実性もなく、神はいな

いだから、その崇拜者たちは何かを植物とか動物とか人とかを選んで彼らの願望の乗物にし、自分らの投影した神をあらわそうとする。さて牛は農耕民によってよくこれに選ばれるのだが、それというのは牛が、彼らが内外に感じる緊張した活力に溢れる生命の、まことに見事な象徴であり乗物であるからだ。(8) この解答は日本の上代の農耕社会の場合も例外としないのではないか。単純な植物採集の生活にとっても、農耕を開始するようになってからも、雨の恵みすなわち水が植物や動物にとっていかに深刻な関心事であるか。

以上のことから、日本で最初に馴致されたのが牛であり、牛が五穀豊饒の為の祈雨の祭祀に登場したのは当然の帰結ではないだろうか。

世界各地に数多く存在する牛を聖獣とした神話伝承は上述のことを裏付けるに十分な資料だと思われる。

#### 4) 牛から馬へ

それでは、最初神聖化された性獣=牛がいかなる理由によって馬へと変化していったか。この疑問については、石田英一郎氏の見解があるので、ここに記しておく。「……牛と馬とは、それぞれの個性を保持しながらも、多くの分野に於て、次第に一体の文化に融合統一されるようになり、したがって祭祀や神話の領域にあっても、前に牛の演じた役割に馬が参加するか、あるいはこれに代わるという現象も、しばしば見受けられるようになった。(9) つまり馬を機動力とするスキタイ、サルマテ、匈奴その後の突厥、モンゴルなどの騎馬民族が牛の縄張りともいべき古代オリエント-インド、中国大陸の農耕地帯に進出し、祭祀・神話を含めてそれぞれの文化を融合させたのがその例としてあげられるだろう。さらにゲルマン民族の移動の場合、アレキサンダー大王の東方遠征などの場合でも同様の結果がもたらされている。

日本の場合は、小林行雄氏による「5世紀前葉には馬は貴重であっても珍稀なものではなくなり、馬が飼育され、乗馬の風習があった。(8)」ということであるので、最初農耕の為に用いていた牛が、その後の馬の農耕利用の優位におされ、水に関する祭祀でも入れ替わってしまったのではないかと考えられる。

#### 5) 土馬と祭祀

「5世紀前葉には馬は貴重であっても……(前出)」とあるように馬は農民にとっても地方官衙にとっても貴重な蓄財であった。1回の水にかかわる祭祀において必ず馬を殺して供犠するということは、おそらく不可能のことであったであろう。しかし、祈雨、祈雨止、その他水にかかわる祭祀に於て馬は必要欠くべからざるものであったろうから、それに替わるものとして土馬の製作が成されたのではないかとと思われる。

また、これは私見ではあるが、「『延喜式』祈雨神祭八十五座の円土川上神と貴布祿神社に奉

納した黒馬と白馬の用い方から、土馬自体の焼成時の色調の差が黒馬・白馬を用いて祈雨と祈雨止に使いわれたのではないかと推測する。①②とありもし黒馬・白馬の使い分けが実際にあったとすれば、「中国の古文獻にみた河神が白馬を求めるとともに……中略……太陽神の神馬としての白馬の思想③」による影響によるものではないか。すなわち、(太陽)と(月)＝(白)と(黒)＝(晴)と(雨・雲)と簡単に対比させて考えていたのかもしれないが、上述の引用文のように太陽神の乗物としての白馬の思想が日本に流入し、また、それに相対するものとして、月の女神(杵尊)の乗物としての黒馬の思想の流入があったとすれば、水の祭祀における黒馬・白馬の使い分けも説明できるのではないかと思える。しかし、我が出雲地方に於いては、それらの出土例がないようであるので、上述のことが実際に言えるとは断定できない。

#### 6) 河童駒引との関連

河童という想像上の動物は、日本独特のものであると聞く。彼は、亀とかえると人間を合わせたような形状をしているが一説では水神が落ちおれて妖怪化したものだという。この河童が馬を水中にひきずりこもうとした話は、「岩代、陸中、越後、武蔵、駿河、甲斐、飛騨、能登、山城、出雲、播磨、長門、土佐、肥前などほとんど日本全土に見い出される。さらに南九州ではスイジン(水神)といえは河童をさし、加賀ではミズシガそれであり、アイヌではミンツチがそれに当たる。すなわちわが国ではミズチ(=水霊)が水中の霊物④」を意味していたのである。

以上のことにより、おそらく河童駒引の伝説が上古の牛馬を供犠して水神に祈る信仰と深く関係しており、その源は、祈雨祀、祈止雨祀また他の水にかかわる祭祀へとたどることができるのではないだろうか。

#### 7) 馬の祭祀とその背景

最後に補足として水にかかわる祭祀が一体どういう政治的背景をもつかにいてここでは考察してみたいと思う。

まず「続日本紀」の文武天皇2年4月の条「戊午。奉<sub>二</sub>馬干芳野水分峯神<sub>一</sub>。祈<sub>レ</sub>雨也。」とあり、さらに皇極紀の中に「隨<sub>二</sub>村々祝部所教<sub>一</sub>、或殺<sub>二</sub>牛馬<sub>一</sub>、祭<sub>二</sub>諸社神<sub>一</sub>。或類移市。或贖<sub>二</sub>河伯<sub>一</sub>。既無<sub>二</sub>所効<sub>一</sub>。」と記されており、他にも多くの資料に牛馬供犠の記載を見ることが出来るので、祈雨の祭りには牛馬を使っていたということを知り得る。

それでは祈雨の祭祀がどのような状況下で行なわれたのか、小笠原好彦氏の著書「土馬考」の中に記述があるのでここに記しておく。

「さて祈雨の祭祀は、村全体の利害にかかわるため共同祈願の形式をもってなされる点に特徴がある。 — 中略 —

古代の農業村落では農耕儀礼に対して、より強い規制が働いていたと推測されるので、祈雨の

祭祀も共同祈願の形態をとってなされたことはまちがいない。

ところで、正史に記されている祈雨の記事については、梅原隆章氏による注目すべき見解がある。すなわち祈雨の記事は「純日本紀」の文武2年以降にひんぱんに記載されるようになることが注意されその背景としては「米作農業に必ず付随して行なわれる祈雨共同祈願が、律令政治の理念からしても、当然に国家的重要儀礼となる必要があったからであると解釈しなければならない。そしてこの雨乞いが、共同祈願の形をとるのが自然の結果である点に於て、村落共同体を強固に統制する為に、好都合の行事であったと同様、国家統一、主権者の権威浸透に絶好の儀礼であった。ことによるという。」さらに「純日本紀」の記事及び奈良時代以降の土馬の出土状況から見れば、祈雨の祭祀権は天武朝以降、律令の祭祀形態として国家がとりこんだのちも、なお村落においてそのまま律令制祭祀にくりこまれ継続して行なわれている。個」

以上の記述の如く、祈雨の祭祀は、国家的行事として、神社、河川、溝池、山頂湖、などで村落の部長が中心的役割を果たし、祈雨の祭祀をとり行なったのではないかと思われる。

## 8) 結 語

縄文、弥生時代またそれ以前において、人々は種々のアニミズムの信仰を持っていた。古代人の信仰は太陽、月、山、川など自然物をその対称とし祭祀時にはそれらの信仰対称（＝神）に何かを供献していたと思われる狩猟民は獲物がとれるように、漁民は魚が取れるようにと祈って神に何らかのものを供献していたのであろう。このように古代の採集文化にとっては自然の産物が採るに足るだけ生まれてくるということは、非常に関心事であって女性の妊娠と同じように神聖で不可思議なことであっただろう。

人間を含め自然の産物が生き繁栄するには、太陽、月、水といったものが絶対必要条件であるということも古代人も知り得たであろう。しかし、それらの大自然は人々の意のままにならぬばかりか時としては古代人の生活を根こそぎ破壊していくほどの力も示していたであろう。従って古代人は太陽、月、水にひたすら祈り、自らの生活の安定を求めた。そして採集文化段階をへて稲作が始まり、農耕文化へと次第に移行してからも、自らの生活の安定を求め五穀豊饒を祈り、太陽、月、水等に何かを供献していたのではないか。農耕が始まってからは3)で述べたように牛が神の運搬者、或いは代理人、或いは神からの与えられた財産として位置づけられ五穀豊饒を祈る祭祀には、重要な役割を与えられていたのではないだろうか。それがその後の奈良時代の中国の竜馬の思想と結びつき水にかかわる様々な祭祀においてよく土馬を用いるに至ったのではないかと考えられる。また水神の落ちぶれた姿としての河童は奈良時代以降民間から発生した説話であり、それは水神を後世次第に、ユーモラスに人格化して行きあがったものではないだろうか。

(錦織慶樹)

## 註

- (1) 石田英一郎 新版「河童駒引考」 P.7 1966年
- (2) 水神が蛇形をとることは南アフリカやオーストラリアにおいてもっとも一般的であり、インドから東アジアにかけてはこれが竜という想像獣にまで発展している。
- (3) 泉森 紋 「大和の土馬」 橿原考古学研究所論集 P.402 1975年
- (4) 註(1)に同じ P.151
- (5) " P.150
- (6) " P.74
- (7) " P.69
- (8) " P.53
- (9) 海神であり、馬神でありまた牛神でもある。さらにポセイドンはクレーターでその神話の原点が生み出され、牛神として出発した。
- 10 註(1)に同じ P.53
- 11 " P.86
- 12 森 浩一 編 P.135～136 昭和49年
- 13 註(1)に同じ P.94
- 14 小笠原好彦 「土馬考」、『物質文化25』 P.43 昭和50年
- 15 註(3)に同じ P.402
- 16 註(1)に同じ P.105
- 17 " P.151
- 18 註(4)に同じ P.44
- 19 平城京、溝付近で土馬の出土例があり近くで祭祀を行なったのではないかと。
- 20 山一川一田と水の流れゆく場所に水神が祀られた。従って前出のオノ神なども水にかかわる祭祀が行なわれたのではないかと。

## その他参考文献

- |       |               |         |
|-------|---------------|---------|
| 森三樹三郎 | 「神なき時代」       | 講談社現代新書 |
| 江坂輝彌  | 「日本文化の起源」     | "       |
| 吉田教彦  | 「日本神話の源流」     | "       |
| "     | 「小さな子とハイヌウェレ」 | みすず書房   |
| 上田正昭  | 「日本神話」        | 中公新書    |



鷹沢A遺跡近景（谷奥をみる）



A1区西壁



↑  
土馬

A 2 区 土馬出土状況

↑  
土製支脚



58年度調査区(手前A1区)



A 2区 遺物出土状況



A 5区 土馬出土状況



C6区 SB02西半部



C6区 SB02内 遺物出土狀況



SB02内 土器出土状態



鹿沢B遺跡近景（東をみる）



鹿沢B遺跡 発掘状況



別所遺跡 調査状況



C 6 区 S B 0 2 出 土 の 土 馬

A 5 区 の 土 馬

P 5 区 の 土 馬

土 馬 破 片

C 6 区 出 土 の 飾 馬

A 4 区 出 土 の 土 馬

紡 織 車



B5区出土  
銅印  
横からみる



銅印  
印面



右 石鐵  
中 鍍銀環  
左 勾玉

薦 沢 A 遺 跡 他  
発 掘 調 査 概 報

昭和59年3月発行

発行 松江市教育委員会

印刷 谷口印刷有限会社  
松江市母衣町89